

Title	「自分らしく生きる」：女優として親善大使として
Sub Title	
Author	紺野, 美沙子(Konno, Misako)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2006
Jtitle	人間教育講座：社会を知る自分を知る自分を育てる (2006.) ,p.7- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20060000-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「自分らしく生きる」女優として親善大使として

女優・国連開発計画（UNDP）親善大使

紺野 美沙子



一九七九年「黄金のパートナー」で映画デビュー。一九八〇年連続テレビ小説「虹を織る」主演。テレビ・映画・舞台に活躍する一方、著作活動も行い、サイエンス・エッセイ「空飛ぶホタテ」では日本文芸大賞女流文学賞受賞（一九九五年）する。

一九九八年、国連開発計画（UNDP）親善大使の任命を受け、カンボジア・パレスチナ・ブータン・ガーナ・東ティモール・ベトナム・モンゴルの視察を行うなど、国際協力の分野でも活動する。

二〇〇六年七月、新宿コマ劇場にて、「弁慶」の舞台に立つ。

二〇〇八年一月、博多座にて「細雪」、同年五月、新国立劇場にて「オットーと呼ばれる日本人」に出演。

女優になったきっかけ

みなさん、こんにちは。紺野美沙子です。私は慶應義塾大学の卒業生でもあり、みなさんの先輩に当たります。今日は、前半では私自身のことについて、後半では国連開発計画について、みなさんにご紹介したいと思います。

私は大学一年生の時から女優の仕事をしています。女優になりたいと思ったきっかけはそれよりもずっと前で、小学校五年生の時に入部したクラブ活動でした。演劇クラブに入って間もない頃に神奈川県青少年演劇コンクールに出場することになりました。その時の出し物が森鷗外の『山椒大夫』でした。主人公は「安寿」と「厨子王」で、私はその「安寿」の役をやらせていただきました。でも、そのクラブ活動の顧問の先生が、まるでヘレン・ケラーを教育したアニー・サリバンのような非常に厳しい方でした。たとえば、小学生に向かって「あなた、その台詞が言えないのだったら、もうやめてしまいなさい!」「もう帰っていいわよ!」と、手加減は全くありませんでした。当然泣き出す生徒が続出しました。しかし当時は「アタックNO.1」のようなスポーツ根性ものが流行している時代でしたから、私やそのクラブの仲間には「こんなことで負けてはいけない!」と、励ましあって練習を続けました。

そして、いよいよ当日を迎えました。生まれて初めての大きな舞台で、大勢の観客を前に演じました。そして舞台の幕が下りた時の達成感や、みんなと一緒に力をあわせてゼロからひとつのものを作り上げたという連帯感を強く感じました。その時に「将来お芝居をする人になれたらいいな!」と思ったのが、女優になったそもそものきっかけです。

学業と仕事

その後、慶應女子高等学校に入りました。周りは頭のいい人ばかりで、カルチャーショックの連続でした。また、大学のように非常に自由な校風で、生徒個人の自由にまかせる学校でした。周囲には「医学部に行きたい」「父の会社を継ぎたい」など、明確な目的を持っている人がたくさんいました。そういつた中で私は、女優になりたいなんて雲をつかむような話を誰にも言い出せずにいました。しかし、偶然にも高校三年生の終わりに映画に出られる機会に恵まれました。こうして大学一年の時からは学業と仕事という二足のわらじを履くことになりました。

ただ、「二兎を追う者は一兎をも得ず」と言われるように、私の学生生活はどちらかと言えば仕事が優先でした。両親には必ず大学を卒業すると約束していましたが、仕事が多忙に忙しくて、なんとか卒業をしなければいけないと思いながら通っていました。しかし大学四年生になり、卒業論文を書く時期に、ちょうど主演映画の撮影スケジュールと重なってしまいました。この時ばかりは「大学をやめてしまいたい」と思いました。それでも図書館の閉館時間ぎりぎりまで頑張り、なんとか卒業論文だけはまともに書き、無事に卒業することができました。

また、大学三年生になり友人たちが就職活動をするようになった頃には、「私はこのまま女優としてやっていけるのだろうか?」「今だったらまだ間に合う。大学を出て、みんなと同じように企業に就職する道を選ぶこともできるのではないだろうか」とずいぶん悩みました。その時に何人かの先輩に話をうかがいました。当時はまだ就職でも男女の差がありましたので、先輩たちは「どんなに成績が優秀で

も、企業に就職したら、そこには男女差別があつて、自分の能力を生かすことができない女性がたくさんいる。そんな中であなたは、実力社会だけれど、男女の差がない、非常に恵まれた環境で、自分のやりたい仕事をしているわけでしょう？ そのままがんばりなさい」と言われました。その言葉で「大学を卒業したら、女優として本格的にやっていこう！」と思えるようになりました。

こうして私は、一九八四年に文学部国文学科を卒業しました。私は学生時代に仕事ばかりしていて、先生方や学部の人たち、特に男子学生とは交流がありませんでした。卒業アルバムをいただいたいてそれを見ると、たとえば理工学部のページにはカッコいい男子学生の写真がたくさん載っていて、「学生時代にこういう方たちと知り合えなかったのはもったいないことをしたな」と後悔した思い出があります（笑）。仕事は卒業してから嫌というほどできますが、大学での四年間は後でどんなに取り戻したくても取り戻せない貴重な時間です。仕事ばかりに追われて、私の学生時代は終わってしまったかと、今でも時々後悔することがあります。反対に、その時代に仕事をがんばってきたから、今、こうして仕事を続けていられるのかもしれないと思っています。

自信がなかった二十代

大学を卒業してからの二十代は、自分自身に自信がもてない時代でした。いわゆる「生き馬の目を抜く」と言われる芸能界は本当に競争が激しく、浮き沈みが激しい社会です。その中で、これといった取り柄がない自分が長く仕事を続けていけるはずがないと、二十代の頃はずっと思っていました。たとえ

ば、演技がうまい人はたくさんいます。はつと振り向いてしまうほどの美男美女もいます。そのような中で、平凡な自分は生き残っていけないだろう、と妙に冷静に分析して思っていました。

今では信じられませんが、当時はまだ女性の「結婚クリスマスケーキ説」というものがありました。これは、クリスマスケーキはクリスマスイブの十二月二十四日には飛ぶように売れますが、二十五日になると叩き売られ、二十六日になると誰も見向きをしないというように、女性も二十四歳までは適齢期だけど、それ以降は…という説です。ですから当時は二十五歳を過ぎると、売れ残るのではないかと焦り始める女性が多かったように思います。とても頭がよく美しい友人たちでさえ、その説に振り回されていました。一流企業に就職した人や、医師の国家試験に合格した人など、私から見たらうらやましいような才色兼備の女性たちが、そのキャリアをあつさり捨てて、お嫁に行ってしまうわけです。

その中で、私は自信を持てずにいながらも仕事を続けていましたが、結婚願望が強く、「三十歳までには結婚したい!」「結婚したら仕事はやめよう」と思っていました。きっと友人たちが次から次へと結婚していく様子を見て焦っていたのですね。女優になりたいと思った頃の気持ちや、自分の夢を実現して、あこがれの職業につくことができたのに、それをまっとうしようという気持ちを、二十代の私はどこかに忘れ去っていたのかもしれない。

ただ当時の自分を振り返ると、「先を見ないで、ひとつひとつの作品をじっくりやっていこう」「階段を一步一歩上って行けばいいじゃないか」という気持ちは持っていました。しかし厳しい世界にいる中で、他人と自分を比べては「あの人はあんなに優れているけれど、それに比べて私はどうしてこんなにダメなのだろう」と、自分を卑下してばかりでした。

そして三十代を目前にした二十九歳の時に、仕事においても、女性としても、とても中途半端な自分に気がつきました。三十代からは女優としての真価が問われるのに、その中で自分は果たしてやっているのだろうかという漠然とした不安もありましたが、そのための努力はしていませんでした。とは言え、お嫁にもらってくれそうな男性もまったく見当たらず、「この先、どうしたらいいだろう」と思い悩んでいました。今から思うと、小さな悩みかもしれませんが、当時の私としてはかなり真剣な悩みでした。

私を変えたエッセイを書く作業

そんな時に、大学の後輩が「紺野さん、本を出してみませんか？」と声をかけてくれました。彼女にとっては出版社に入って初めて任された単行本だったそうです。初めて編集者として一本立ちするという仕事のパートナーとして、私を選んでくれたのでした。いわゆるタレント本というと、ゴーストライターがいて、インタビュールしたことを原稿にまとめて、体裁を整えて出版するという方法もありますが、彼女は非常にまじめな女性で、「時間がかかってもいいですから、紺野さんの言葉で、必ず自分で書きあげてください」と言われました。私は文章を書くことが非常に苦手でしたので、私が一生懸命書いた原稿を彼女に渡すと、「この文章はよくない」「ひとつの文章が長過ぎて何を言っているのかよくわからない」というように、作文教室のようなやりとりがずっと続きました。

こんなに苦手だったエッセイを書いてみようかと思ったことには、ちょっとした理由がありました。

先ほど申し上げたように、当時の私は仕事にも恋愛にも行き詰まっていた、ある時に本屋さんで占いの本を手にとって読んでみました。すると「自分の苦手なことに挑戦すると幸運を呼ぶ」とありました。そこで単純ですが「これはエッセイを書きなさいという天のお告げかもしれない」と思ったのです。こうして、後輩の誘いを引き受けて、エッセイを書くことにしたわけです。

私にとっては、エッセイを書くということは、生まれてはじめて自分自身と真剣に向き合わなければならぬ作業でした。仕事柄、インタビューを受けることは多々あつても、自分の心の奥底をノックしてひとつずつ確かめていくような作業をしたことはありませんでした。たとえば「女優という仕事について本当はどう思っているの？」ということを、自分にゆっくり問いかけて検証していく。「結婚したいって言うていたけれど、どうしてそんなに結婚したいの？」と問いかけることで、家庭について、結婚について自分が本当にどう考えているのか、自問自答してみる。そういった作業をずっと続けていくことになりました。結局、その本が出版されるまでに一年半もかかってしまいましたが、それは私にとって非常に重要な時間でしたし、初めて少し大人になれたかなと思えました。

このエッセイを書くことによって、自分自身のいい加減な面や、物事を消極的にとらえる面など、自分自身の嫌なところをたくさん発見しました。でも人間ですから、いいところもあれば、悪いところもある。それらをひっくるめてひとりの人間なのだと、とても当たり前のことですが、私はその時に初めてわかったのです。その、いいところもある、悪いところもある自分を自分自身で応援してあげなくて、一体誰が応援してくれるのだらうと思いました。ですから、私は自分で自分のことをもっと好きになつて、もっともっと応援してあげたい、自分が自分の応援団長になつてあげようと、その時に思いました。

女優の仕事についてですが、十歳の時になりたいと思った夢を、私は本当に運がよくてかなえることができました。あこがれていた夢があつても、途中であきらめなくてはいけない人が山のようにいる中で、自分が今実現できているではないか。それなら、その仕事を死ぬまで続けて、少しでも努力して、極めていきたい。世の中に「女優・紺野美沙子が必要だ」と言ってくれる人がいる限り、女優として頑張っていこうと、三十歳の時に思いました。

結婚についてですが、なぜ結婚したいと思っていたのかというと、仕事が終わって家に「ただいま」と帰った時に、その日あつた出来事やたわいもない話ができる家族がほしかったからです。でも「本当にこの人とともに人生を歩んで行きたい」と心の底から思える人が出てくるまで、結婚などしなくてもいいのではないかと思えるようになりました。周りのみんなが結婚するからとか、適齢期を過ぎたからといったことはとても小さなことで、自分にとっての適齢期は「この人だ」という人が出てきた時なのだと思えるようになりました。そんなふうに焦りが消えた三十一歳の時に、夫との出会いがあり、結婚しました。その時にひとつ格言を作りました。「良縁は忘れた頃にやってくる」(笑)。まさに悟りを開いた、そんな感じがしました。

チャレンジし続ける

自分で自分を応援しようということで、三十歳の初めに「また、がんばっていこう!」という気持ちになりました。その後すぐに結婚したものですから、私の三十代は仕事と新しい生活、そして育児も加

わって、非常にあわただしく過ぎて行きました。しかし女性が仕事をもちながら、家庭をもち、子育てもしていくのはとても大変なことで、企業ではやはり一度辞めてしまうと同じ条件で復帰することが難しいと言われていました。私も同様の考えを持っていて、一度やめてしまうと、元のレベルまで自分を高めるにはとても時間がかかってしまうと思いました。ですから、多少ペースを落としたとしても、ここまで続けてきました。

最近では、またいろいろと変化があり、考えることも多くあります。それには親善大使を務めていることも大きく影響していると思います。また、周囲の友人たちで亡くなる方が出てきました。驚いたことに、高校の頃のクラスメート約四十人のうち、もう四人も亡くなっているのです。私から見ると、才能があつて、うらやましい人たちばかりでした。こうして亡くなられた友人たちを見ていて、残された自分はその人たちの分まで何かやらなくてはいけないから、残されているのだろう、と思うようになりました。

そんな時にある方に言われた言葉があります。「人間には大きな目的がある。やらなくてはいけないことがある。ひとつは自分のもっている可能性を十二分に引き出す努力をすること」。自分はこの程度だなと思つたら、そこで止まってしまいます。だから自分自身にはまだまだこんな可能性があるかもしれない。こんなことをやってみたいから、その目標に向かって、こんな努力をしてみようなど、自分のできる努力、自分の能力を最大限に引き出すための努力をしなくてはいけない、と言われました。

私はこの言葉に心から共感し、チャレンジし続けることを決心しました。女優として今まで私は映画やテレビの世界をやってきましたが、ここ数年は舞台の世界にチャレンジしています。みなさん

が生まれる前から、ずっと仕事をしているわけですが、なかなか「私は女優です！」と胸を張って言えません。そんな中、もう一度ゼロから訓練して、みなさんの前で「私は日本の女優です」って言えるような実力を身につけたいと思い、去年から基礎的なレッスンを始めました。自分自身を磨いて、一流の女優になりたいと思っています。私の中の「一流」とは、代表作をもって大きなところでロングランをしたい、あるいは大河ドラマの主役をやりたいといったようなことではなく、地方の小さな小屋でもいいから、本当に人の心を打ついい作品に出て、その作品の中の自分の役をきちんとお客さんの心に届けられる、そんないい芝居ができる、そのような意味を持っていると思っています。

また、チャレンジに関すること以外に「もっている自分の可能性や能力を使って、社会に貢献することそれが、人が人として生きるためにとても重要なことだ」と言われました。自分が好きなことで人の役に立ったり、人様の心を動かしたりすることができたら、こんなに嬉しいことはないだろうと思います。みなさんはこれからさまざまな職業に就かれると思いますが、それぞれの人が、それぞれの立場でできることをやればいいのではないかと私は思います。

私のエネルギー源

こうした思いから今の私の気持ちは十代、二十代のみなさんと同じぐらいで、自分の夢に向かって再スタートを切ったばかりだと思っています。そんな中で、私のエネルギーになっているものがあります。それは家族だったり、仕事だったり、あるいはこれからお話しする親善大使の仕事だったりします。そ

れぞれ違いますが、ささやかな日常の中で「私が必要とされているな」と感じる事ができるという共通点があります。自分が誰かの役に立っている、誰かに必要とされていると実感した時に、人間はエネルギーを発揮できるのではないかと思います。

たとえば、家庭の中で子どものために餃子を作ったとしましょう。子どもが「ママ、今日の餃子おいしかったよ。また作ってね」と言われたら、とても嬉しい気持ちになれます。そして「今度はもっとおいしいものを作ってあげよう。」と思います。仕事にしてもそうです。たとえば今回のように理工学部の先生から「人間教育講座の講師に来ていただけませんか」というお誘いをいただいた時も、多くの卒業生がいる中から選んでいただけたことを嬉しく思いますし、その気持ちに応えたいと思います。どんな仕事であっても、「この仕事を紺野美沙子にやらせたい」と思わせるような存在でありたいと思いますし、そのようなお仕事をいただいた時に、期待以上のものをお返しできるような努力をこれからも続けていきたいと思っています。

女優の仕事をしていてよかったなと思うのは、もちろん役を通じて、自分自身がいろいろな人たちの人生を疑似体験できたり、いろいろな時代に飛んで行けたりするというおもしろさもあるのですが、本当に一番嬉しいのは、私が出演した作品を見た人から「とてもよかった」「温かい気持ちになりました」「元気が出ました」というようなお言葉をいただいた時です。

そして、役者のお仕事以外に八年前から、私に新しい仕事が増えました。それがこれからご紹介する国連開発計画の親善大使という役割です。一番大きな仕事は、年に一度、国連開発計画が支援している開発途上国に行き、そのプロジェクトの様子を視察して、その時に見たことや感じたことを一般の方々

に伝えることです。

これまでに六カ国を訪問しました。先々ではとても歓迎していただきました。その地域で私自身が何をしたというわけではありませんが、国連開発計画や日本政府がさまざまな貢献をしています。こんな私がある場所に訪問するだけで喜んでくださる方がいる。それは私にとって励みになりますし、これからも細く長く続けていけたらいいなと思っています。本当にたくさんの方々からエネルギーをもらって、今の私があると感じています。

国連開発計画の親善大使として

それでは、ここからは国連開発計画についての話をさせてください。

国連開発計画という名前ご存知でしょうか。国連開発計画はUnited Nations Development Programme(UNDP)という国連機関です。日本でよく知られているユネスコやユニセフ、国連難民高等弁務官事務所と同じような国連機関のひとつですが、ユニセフや国連難民高等弁務官事務所は、どちらかというと子どもや難民を対象とした人道援助の機関ですが、私が親善大使をしています国連開発計画は、国連で一番大きな開発援助の機関です。開発援助とは、たとえばイラクやアフガニスタン、東ティモールなど、紛争があった国や地域あるいは途上国が、他の国や国際機関の助けを受けずに自立するまで、国作りや人作りのお手伝いをすることです。最も大きな目的は全世界の貧困の撲滅で、ひとつの国や地域を自立させるために、さまざまな活動を行っています。

国連開発計画の重要活動分野には、①危機予防と復興、②民主的ガバナンス、③エネルギーと環境、④貧困削減、⑤HIV／エイズがあります。①危機予防というのは、紛争が起る前、つまり火種が小さなうちに問題を解決する努力をすることです。当事国の政府との連携が欠かせません。また復興とは、イラクのようにいろいろなインフラが失われてしまったところで、現地の人を雇用しながら、大きな道路を作ったり、建物を建てたりというプロジェクトを行うことです。②民主的ガバナンスというのは、民主的な政治が行われるように、政治的なサポートをしたり、その国の法律作りのお手伝いをしたりすることです。③エネルギーと環境では、人間が人間として必要な、電気・上下水道・ガス、そして病院や教育機関などの建設のお手伝いをします。④貧困削減では、その国や地域にあった雇用の促進をしています。さらに貧困の最も大きな原因のひとつはやはり⑤のHIV／エイズですから、エイズに対する啓蒙活動のお手伝いもしています。このように国連開発計画の活動は非常に多岐にわたっていますから、その内容がなかなかわかりにくい機関ではありますが、途上国の国作りや人作りのお手伝いをしている機関だと覚えていただければ嬉しく思います。

その親善大使にはどんな人がいるのでしょうか？ もうすぐワールドカップが始まりますが、ロナウド選手やジダン選手もUNDPの親善大使です。他にも、ノルウェーのホーコン皇太子や、ノーベル文学賞を受賞した南アフリカ共和国の女流作家ナディン・ゴードイマーさんもいらっしやいます。ロナウド選手やジダン選手は貧困撲滅キャンペーンのコマーシャルにボランティアで出演したり、中東紛争の解決のためにパレスチナやイスラエルの子どものためにチャリティサッカーを行うなど、サッカーを通じた活動を行っています。私は、先ほども申し上げましたように、年に一度途上国に行って、その様

子を視察することが主な仕事ですが、その他にも国内での時間が許す限り、報告会を行ったり、小・中学校に話をしに行ったりすることもあります。

今日はあまり時間がないので、私がこれまでに訪問した六カ国の中で特にみなさんにお伝えしたい、衝撃的な体験をお話ししたいと思います。

◆カンボジア

一九九九年に、親善大使として最初に訪問したのがカンボジア王国です。ベトナムとタイの間にあります。写真は、カンボジアの首都プノンペンから南に車で三時間ぐらい行ったところにある、プレイ・ビヒアー



プレイ・ビヒアー村の小学校

イ・ビヒアーという村の小学校で撮ったものです。カンボジアは、みなさんもお存知だと思いますが、最近非常に発展しまして、特に都市部の復興は目覚ましいものがあるようですが、こうした田舎は私が訪問した当時と今もあまり変わらないそうです。見ていただくとわかるように、カンボジアの小学校には机も椅子もありませんし、地面にほったて小屋が建っているようなところで子どもたちは勉強していました。となりのクラスとの間に壁がなくて、声が筒抜け

です。

小学校の一年次には百三十人ぐらいの子どもがいますが、六年生になると三十人ぐらいいきません。「一年生はあんなにいるのに、六年生になるとどうしてこんなに減っちゃうの？」と聞いたところ、途中でやめてしまう子どもが多いからだそうです。もちろん経済的な理由もあります。あるいは途上国の場合には一家庭にいる子どもの数が多いですから、小学校三、四年生にもなると、下の子どもの面倒もみなくてははいけないし、畑仕事の手伝いもしなくてははいけない。この地域には縫製業の家が多くて、ミシンをかける手伝いもしなくてははいけないわけです。子どもは貴重な労働力だということで、どんどんドロップアウトしてしまうということでした。

今、世界中で小学校に行けない子どもたちが約一億二千万人いるそうですね。日本の人口と同じぐらいの数の子どもたちが学校に行っていない。経済的な理由で行けない場合もあるし、学校がないというところもたくさんあります。カンボジアも例外ではありません。

ちなみに写真の中で、私の横で手を上げている女性は青年海外協力隊の方で、カンボジアに二年間派遣されている、初等教育の専門家です。よく新聞やテレビで、日本のODAが無駄遣いされている、あるいは日本の援助はお金ばかりで顔が見えないなどと報道されていますが、私の知る限りでは非常に役立っているものがたくさんあると思います。特に日本は「箱もの」と呼ばれるインフラ整備だけではなく、技術協力の分野がとてみかされています。このような青年海外協力隊の方のほかに、JICAの技術専門の方もいますし、シニア協力隊の方やさまざまなNGOで活動する方もいます。そのように日本の援助が役に立っている、日本の人材が役に立っているということは、マスコミにはなかなか報道さ



フノンペンのスラム地域

れにくいのだなということがよくわかりました。みなさんと同じ年ぐらいの若い人たちで、電気もガスもない、非常に厳しい環境の地域でがんばっている人たちがたくさんいることを、ぜひ知っていただきたいと思います。

次の写真をご覧ください。これがカンボジアに行った時に私が最も衝撃を受けた出来事です。首都プノンペンにある、いわゆるスラム地域を訪ねた時です。ご覧になってわかるように、子どもたちはおむつもしていませんし、靴もはいていません。そういったなかで私が非常に衝撃を受けたのは、貧しさゆえに子どもを売ってしまう、人身売買がまだ残っているということでした。

カンボジアはタイと国境を接していますが、カンボジアで売られた、あるいは誘拐された子どもは、まずタイに連れて行かれて、十歳以下の場合には、新聞やお花、煙草などを街頭で売る物売りにさせられます。十二、十三歳になると、女の子の場合には風俗や売春の仕事につかされて、男の子の場合には大きな工場や農場で肉体労働をさせられるのだそうです。女の子の場合には、エイズ予防の知恵などありませんから、売春をさせられて、多くの子はエイズに感染して早くに亡くなるという現実があります。

私はカンボジアを訪れたこの時まで、今、この二十一世紀に人身売買が存在するということをまったく知りませんでしたから、この話

を聞かされた時に本当に驚きました。子どもひとりがいくらで売り買いされているのかと聞いたところ、それこそ、三、四万円なんですね。みなさんがちょっとしたものを買うような、そんな値段で人間ひとりの命が売り買いされていることを知って、非常に驚いたわけです。

人身売買はカンボジアだけのことでありません。中南米でも、アフリカでもあります。なかには臓器売買のための誘拐もありますし、アフリカなどでは、ニュースでも報道されていますが、兵士にするために子どもを誘拐して軍事訓練を施すこともあるそうです。もちろん人身売買の対象は子どもだけではなく、はつきりした数字が出ていないのだそうですね。ユニセフによると、十八歳以下の子ども約百二十万人が一年間に人身売買の被害にあっているという、二〇〇三年の統計があります。

日本にいると信じられないような、考えられないようなことが、一歩外に出ると存在している。今、この時代にもお金によって売られていく子どもたちがいることを、みなさんにも知っていただきたいですし、関心をもっていたきたいと思います。

◆パレスチナ

二〇〇〇年の秋に、今も非常に混迷を深めているパレスチナに行きました。先ほどのカンボジアもそうですが、パレスチナというと中東問題です。アメリカのクリントン前大統領が中東問題について「世界で最も解決が困難な問題」と言ったそうですが、中東の問題というのは、私も訪問が決まるまでまったく興味がありませんでした。というのも、新聞の国際面に載っていても、「これは難しいから、とばしておこう」と、ずっと触れないでいた問題でした。でも実際に自分が行くことになり、少し勉強しま



ガザの子どもたち

した。

この写真はガザの子どもたちです。さまざまな途上国に行き、さまざまな状況の子どもたちに会う機会があります。でもパレスチナのガザ地域にしても、カンボジアにしても、東ティモールにしても、ガーナにしても、子どもたちはみんな純真で、好奇心いっぱい瞳をしていて、かわいい。たまたま生まれた場所がパレスチナや東ティモール、アフリカだったために、周りの大人たちの社会的な状況が違ってしまっているために、そんな環境に置かれてしまっている。どうしてなのだろうな、いつも思います。

途上国に行つて家に帰つて来ると、いろいろなモノやメディアに囲まれた贅沢三昧の自分の息子がいて、この格差はどこからくるのだろうかといつも考えさせられます。そして、非常に厳しい状況にいる子どもたちに対しても自分は何をできるのだろうかと考えますが、なかなか答えは出ません。でも、どんな問題でもまず、一人でも多くの方に関心をもつていただくことが大切だと思いますし、特にこれからの国際社会を支える若い方たちに、こういった問題に少しでも関心をもつていただくために、私にできることがあるのではないかと考えています。

パレスチナに行った時に非常に印象的だった言葉があります。ヨルダン川西岸に、「世界最古の街」と呼ばれているジェリコという街があります。そこに日本の援助でできたジェリコ病院という病院があ

りますが、その院長さんに「今最も必要なものは何ですか」と聞いたところ、「自分はどういい。自分の子どもたちには平凡でいいから、自由な生活をさせてあげたい」とおっしゃいました。その言葉が今のパレスチナを象徴しているような気がしました。パレスチナの人たちというのは、たとえば隣町に買い物に行くといった、日々の暮らしすべてを制限されています。私たちがごく普通にやっている生活を、彼らはすべて抑圧されてしまっているわけです。

そういった人たちを見て日本に帰ってくると、当たり前のことに対する感謝の気持ちが本当に強くなりました。たとえば、朝起きて寒ければ、スイッチひとつで暖房をつけて暖かくすることができます。夜も暖かいお風呂に入れるし、水道の蛇口をひねれば安全に飲める水が出てきます。

◆ブータン王国

その次に行ったのがブータン王国です。みなさん、機会があつたら、ぜひブータン王国に行ってみていただきたいと思います。

ここは世界でも非常に珍しい国で、国王陛下自らが、GNPではなくて、GNH = Gross National Happiness (国民総幸福) という指標を掲げています。経済の発展だけではなく、国民ひとり一人の心の幸せを大切にしていこうという指標を打ち出している国なのです。自分たちの国のような小さな国が世界の中で生き残っていくために、自分たちの国の文化や伝統、環境を大切にしていこうということで、公の場所では写真のように民族衣装の着用が義務づけられています。環境問題に対しても非常に敏感で、わずかながらでも森林面積が増えている国は、世界中でもブータンだけだそうです。



クイーンマザー

日本人が昔からもつていた文化や礼節、伝統などは、この何十年の間に経済発展と引き換えに失ってききました。それは日本だけでなく近隣のアジア諸国でも一緒ですが、そのようなことをこのブータンという国はよく見ていて、自分たちは自分たちの伝統や文化をしっかり守って、急ぎすぎない経済発展をしていこうという方向性を明確に打ち出しています。日本ではやっている「国家の品格」ということをとてもよく感じることができ、素敵な国だと思っています。もちろんさまざまな問題を抱えています。が、機会がありましたら、ぜひ訪問していただきたいと思っています。

◆ガーナ共和国

三年前の二〇〇三年に訪れたガーナです。ここについてもひとつだけお話をしてください。ガーナでも印象に残ることがありました。アフリカではエイズの問題が非常に深刻で、それはガーナも例外ではありません。私が行った当時、ガーナには約十七万人のエイズ孤児たちがいました。

この写真は、首都のアクラから車で三時間ほど行った奥地のマンヤクロボという地区で撮ったものです。この地区にはエイズの孤児が特に多いのですが、彼らに対してこの写真に写っている「クイーンマザー」と呼ばれるおばちゃんたちが非常に大きな役割を果たしています。「クイーンマザー」とは地元の婦人会のようなもので、自分た



ガーナの少年

ちの地域でエイズ孤児がたくさん出たということで、彼女たちが立ち上がった、一家庭六人のエイズ孤児を引き取りましょうということで、里親になって、自分の子どもと同じようにエイズ孤児たちを育てているんですね。私はたったひとりの小学五年生の息子を育てるだけで毎日ヒーヒー言っているのに、ガーナのおばちゃんたちは、情けは人のためならずの精神で、困った時はお互い様と、みんなで助け合ってやっています。

日本にもかつてあったような助け合いの精神です。日本はもはやどんどん失っていつてしまつていますが、こういったアフリカのガーナの小さな村では未だに根強く残っているのです。さまざまな面で、こうしたところには、私たち先進国に住む人間が学ばなければいけないことがたくさんあるなと思いました。

次の写真の少年は、「ある日突然エイズが僕たちの村にやってきて、僕のお父さんとお母さんを奪ってしまった。僕はエイズが憎い!」と言っています。私はこの時に初めてアフリカに行ったのですが、それまで日本は非常に気前のいい国だと思っていました。たとえば、外国から偉い人が来ると、小泉首相が〇億円の支援を表明したりします。しかし実際に自分がその地を訪れて、今目の前に困っている人

や助けを求めている人がいるのなら、同じ時代に同じ地球上で生きている人間として、少しでも余裕があれば手を差し伸べるのは当然ではないかなと思いました。

この写真の少年はさらに、「でも、国連の方や国連の親善大使の方が僕たちの村に来てくれたから、僕たちはもう大丈夫です」と言ったのです。その言葉を聞いた時に「私はいったい何ができるのだろうか？」とまた思いました。はつきり言ってまだ何もしていません。ただ、私はこの時の少年の言葉が忘れられなくて、二〇〇八年を目標にしてエイズ孤児たち、エイズに苦しんでいる人たちに向けて助けになるような本の出版を考えています。きちんと形になるかどうか、まだはつきりとはわかりませんが、もし二〇〇八年に世に出ましたら、みなさんにぜひご協力をお願いしたいと思います。

◆東ティモール

この後に東ティモール、そして二〇〇五年にはベトナムに行きました。そして今年（二〇〇六年）の夏にはモンゴルを訪問する予定です。今まで訪れた六カ国の中で最も貧しかったのは東ティモールで、数日前の新聞にまた治安が悪化しているとありました。私が訪問した時には、東ティモールが独立したばかりで、国連のさまざまな機関が国の再建のためにどんどん入っており、これから平和な国ができるという機運が高まっていたのですが、また治安が悪化しているのはとても残念だなと思います。

東ティモールほど何もかもがない国は他にないのではないのでしょうか。国会議事堂はありますが、法律はまだない。公用語も統一されていない。電気や上下水道などインフラもまったく整備されていません。私が訪問したのは二〇〇四年の夏ですが、日本は猛暑でした。猛暑の日本では、どこに行ってもこ

れでもかというぐらい冷房が効いていました。電車に乗っても、コンビニに行っても、スーパーに行っても、きちんと冷房が完備されています。そんな日本を脱出して東ティモールに行ったのですが、写真でおわかりになるように、まだカマド炊きです。いわゆる化石燃料の恩恵を受けて、それに大きく依存している日本と、そういったエネルギーにまったくアクセスできない東ティモール。そのエネルギーの問題ひとつをとっても非常に大きな格差があります。その格差をなんとかしない限り、少し大げさかもしれませんが、本当の意味での世界の平和は訪れないのではないかと思います。

私たちは非常に恵まれた日本に今暮らしています。そのような中で、みなさんは慶應義塾大学の理工学部で学んでいる。いわば選ばれた方たちだと思います。そのような恵まれた立場にいる人間だからこそ、やらなくてはいけないことが絶対にあると思います。先ほど申し上げましたが、これからの可能性がたくさんあるわけですから、自分で自分を信じて、自分を応援して、これから大いにその可能性をふくらませて、みなさんなりの得意分野でぜひ社会を引っ張り、社会に貢献する人間になっていただきたいなと思います。

みなさんには必ずできると思いますし、非常におもしろいことに、自分自身が「変わりたい！」と思って、その身近な目標に向かって努力すると、まわりも変わってくるのですね。これは本当です。親善大使としてこれまで八年間活動してきて、非常にシリアスな状況を目にしてきました。その間にニューヨークの同時多発テロもありましたし、さまざまなテロや、津波もありました。日本国内でも信じられないようなことが日々起こります。そういった中で、私は前にも増して「人生って突然幕を下ろすことがあ

る」と思うようになりました。私もみなさんも限りある時間を生きています。その限りある時間を前向きに生きないと本当にもつたいないと思います。もちろん不安材料は私もありますし、みなさんにもあるでしょう。不安に思ったら、不安に思ったまま時間を過ごすのではなく、その不安を打ち消すための努力をする時間にしたいと思います。みなさんもぜひ、自分を好きになって、自分を信じて、みなさんらしい人生を過ごしていただきたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

(視察写真撮影：篠田伸二)

質疑応答

Q1 学生A（理工学部四年生） 日本は経済面に関してはインフラも整っていて、一般的には豊かだと言われていると思います。紺野さんご自身はさまざまな発展途上国の現状をご覧になって、本当の豊かさとは一体何だと思われますか？ 紺野さんのお考えをお聞かせ下さい。

A いきなりとても難しい質問をありがとうございます(笑)。よく、コマーシャルのコピーなどでも「本当の豊かさとは何だろうか」と出てきますが、ブータン王国訪問時の私のテーマがまさに、この問題

でした。『地球の歩き方―ブータン』の最初のページには「貧しいけれど豊かさを感じる国」というコピーが書いてあります。「そうか、ブータンってそういうところなのか、じゃあ本当の豊かさって何だろう」と思いながら一週間旅をしました。

その結論は出ていないのですが、モノや情報だけでは人の心は豊かにならないということです。私がブータンに行つて思ったのは「足るを知る」ということです。ブータンの方は自然とともに、とても謙虚に生きています。ですから食べ物にしてもそうです。たとえば彼らは牛に似たヤクをよく食べますが、小分けにして、ナマで食べるところ、乾燥させて長く食べるところというように、とても大切にしています。大量生産・大量消費・大量廃棄の日本とは、まったく対極をいく国なのですね。ですからさまざまな人の心の中で、常に自然や家族に対する日々の感謝を忘れない。つまり、身の丈にあった暮らしということかな。そんな気がします。自分らしく、周囲に影響されず生きるということではないかと思えます。

たとえば女の子だったら「みんながブランドをもっているから私も欲しいわ」という人がいたり、「私はそんなものじゃないわ」という人がいたりするかもしれません。自分なりの価値観をもって生活するということではないでしょうか。そのためにはやはりいろいろな失敗もするだろうし、さまざまな世界を覗いていく中で、自分らしさが時間をかけて培われていくのではないかと思います。だから二十代のうちは本を読んだり、いろいろな先輩の話を聞いたり、旅に出たりして、とにかくあちこちにつかっいて、その中でぜひ自分なりの価値観や豊かさを見つけていたきたいと思えます。

Q2 学生B（商学部二年生）

国連開発計画の親善大使をなさっている紺野さんが、このような世界平和に関するお仕事に関心をもつて、それを行動に移されたきっかけ、あるいは女優のお仕事との接点とは何だったのでしょうか？

A 原点は小・中学校の時にカトリック系の学校に通っていたことだと思います。当時はボランティアという言葉はなく、奉仕活動という時間がありました。それは課外活動だったのですが、有志の子どもたちがする活動で、特別老人養護ホームを訪問して、入所なさっているお年寄りとお話するというボランティアをしたことがあります。当時は中学生ですから、特に何ができるといってもなく、ただみんなで出かけて行って、ごく普通にお年寄りとなわいもないお話をするだけで、とても喜んでくださったんですね。自分たちが顔を見せるだけで喜んでくれたことが印象的でした。それからはそうした活動には縁がなく、いわゆる芸能人チャリティバザーに参加する程度でした。

ところが八年前に突然、国連開発計画本部から親善大使就任の依頼を受けました。親善大使というと、日本ではユニセフ親善大使の黒柳徹子さんがとても有名ですから、ぱっと黒柳徹子さんのお顔が心に浮かびました。親善大使というのは社会的地位を極められた方が、ある意味社会に恩返しするような仕事ではないかと思っていましたし、私では若すぎるのではないかとも思いました。私は帰国子女でもありませんし、英語の成績もすごく悪かったので、英語コンプレックスもあって、「英語も喋れないから無理です！」と申し上げました。当時のUNDPの総裁の方が「これからの国際社会を担う若い方たちに国際協力の大切さをより強くアピールしていきたいので、比較的若いあなたがいいのだ」と言われて、なるほどと思いました。本業に支障のない程度の活動でよいということでしたので、「こんな私で

もお役に立てるのならよろこんで」という気持ちでお引き受けしました。私はフリーランスの立場なので、仕事をいただくことをとてもありがたく感じますし、ご縁だなと思います。ですから親善大使の仕事をしていただいたのも何かの縁だなと思って、微力ながらもお役に立てればという気持ちで続けています。

Q3 学生C（法学部二年生） 私もクリスチャンで、フィリピンに行ったこともあります。国際協力について、積極的に私たちができるとにはどんなことがあるのでしょうか？

A 国際協力でなくても、国内のことでも何でもいいと思います。いわゆるボランティア活動ということになるかと思いますが、ボランティアに関する本やインターネットのサイトなどはたくさんあります。たとえばお金にちよつと余裕のある人はお金を寄付していただくことでもいいですし、時間に余裕がある人なら実際に途上国に行ってみる、人材を募集しているところに行ってみるなど、何でもできると思います。「私はこういうことが得意だから、こういうことができる」ということがあったら、たとえばインターネットを使って検索してみれば、みなさんなりの立場で無理のない範囲でできる活動は必ず見つかると思います。細く長くの活動でも構わないので、とにかくまずは最初の一步を踏み出していただけたらなと思います。私には今、目標としていることがひとつあります。それは、日本国内で誰もがごく当たり前に何らかの社会貢献活動をしている、それが珍しくなくなるように、みなさんに少しでも認知していただけるように活動していきたいと思っています。

Q4 学生D (理工学部三年生)

先ほど紺野さんは、自分のもっている可能性を最大限に活かすためにがんばろうとおっしゃっていました。しかし、自分の可能性の存在すらあればいいという段階でして、自分自身を信じきる不安や怖さも感じているのが正直なところです。自分自身を信じきる時のアドバイスをいただけますでしょうか？

A 私はお芝居の世界に生きてきましたが、かなわないと思う人ばかりです。でも、どんな世界にしても、その道を究めている人はかつこいいなと思います。歌舞伎役者でもお肉屋さんでも何でもいい。自分の道を究めている人。たとえば最近なら、フィギュアスケートの荒川静香さん。ああいうふうに一流になる人はおそらく多くのものを犠牲にしているのではないかと思います。荒川さんでしたら、恋愛やおしゃれなど年頃の女性がやりたいことを全部犠牲にして練習に打ち込んで、金メダルを取ったのだと思います。やはりそのぐらいすべてを捨てて何かに賭ける時期がないと、競争に負けてしまう。だから一流になって、しかも残っている人というのは、やはりみなさんある時期すべてを捨ててそのことに没頭している。私はそのような方にお目にかかる機会が多いのですが、私にはできないと思います。私はどちらかというと、いろいろなことを、あれもこれも常にやっていたいタイプです。それが自分だと思うので、自分がないタイプの、ひとつのことを極めたタイプの人にあこがれます。みんな自信がないわけです。

今、世界の頂点にいる人というのは、頂点に行ったら次は落ちなくてはいけないという強いプレッシャーの中で戦っていると思います。イチロー選手もそうだと思います。そのプレッシャーと戦うためには、常に自分を磨いていくしかない。ですから今トップにいる人はみんなそうしているわけですし、

それができる人しかトップに続けることはできないわけです。

だから不安を感じるのは当たり前だと思います。でも、もしも自分で「これだー」というものが見つかったら、彼女も捨てて、すべてを捨てて、それに没頭する時期があれば、何らかの結論が出る気がします。それでもしダメなら、また方針転換すればいい。とりあえず没頭する時期が若い時にあってもいいのかなと思います。私はなかなかそれができなかったので、これから没頭してみようかなと思っています。

Q5 学生E (理工学部修士二年生) 二〇〇五年にカンボジアに観光で行きました。アンコールワツ

トなどのあるシエムリアップという街を訪れたのですが、ここは観光に非常に力を入れているところでした。郊外は昔ながらの貧しい生活をしている人がたくさんいますが、街に入ると外資系の豪華なホテルがたくさん並んでいます。また郊外には大型店がたくさんあり、街としては品物が豊富に揃っているのですが、地元の商店街はそうでもなく、その街自体が育っている印象は受けませんでした。メーカーに就職している同級生もたくさんいるのですが、メーカーは労働力が安い発展途上国に工場を作ったりして、海外進出も盛んにしています。大きな工場ができて、地元の人たちはそこで働くことによって、国や地域にお金が入るわけですから、国や地域にとってはいいかもしれません。しかしこれは、ブータンのようにその国らしさを発揮しながら成長していく図式とは少し違うのではないかと思っています。そうした視点から、これから海外進出していくメーカーなど企業に対して、紺野さんが思うことがあったら教えてください。と思います。

A 難しい質問ですね。カンボジアのシエムリアップについては、八年前に私も訪れました。カンボジ

アはやはり世界遺産であるアンコールワットを目玉にして、観光で立国していこうということで、非常に力を入れていました。私が行った時には、シエムリアップの街に子ども病院が二軒もありました。本当に子ども病院が必要なのは、タイとの国境で、まだ地雷がたくさん埋設されているような辺鄙なところですよ。世界中の人が訪れる、シエリムアップのような目立つところに子ども病院が2軒もあるということが、とても偽善的な感じがしました。援助の世界にもそういったきれいいごとではいけない部分がたくさんあり、たとえば途上国でも政府首脳陣の腐敗や賄賂の問題など、表向きには言えないけれど、日本の援助したお金は一体どこに行っているの？ という部分もあるようです。国連にしても、注目が集まる地域にプロジェクトを集中させているとも言われています。やはりどんな世界にも理想だけでは通じない部分があるのだと思います。

そのような中で、日本企業については私にはよくわかりませんが、たとえば一時日本でナタデココがはやったときに、その原産地にどっと工場ができて、ナタデココ景気にわいたけれど、日本でブームが終わったら、日本企業も一斉に手を引いて、元の貧困に戻ってしまったということもありますよね。もとの貧困どころか、環境が破壊されて、以前よりも悪くなってしまった。ですから本当にその国に根ざして、細く長くでも、その国の経済発展を考えてやる経営だといいますが、どうでしょうね？ 難しいところですね。日本の企業は今、少しでも安いところを求めて、競うようにしてさまざまなところに出かけているようですから、それによって現地の人たちの雇用が生まれて、技術力もアップされれば、それはそれで非常にいいことだと思います。しかし、海外に工場を作るからには、責任をもって長く続けていただきたいなと思います。

Q6 学生F (法学部一年生) 今の紺野さんのお答えで、やはり「きれいごとだけではない」というご指摘には私も同感です。お金を支援するだけでなく、途上国が自立的に、自発的に発展していくのではないと、続かないでしょうし、意味がないと思います。それに関連して、お話の中でUNDPは自立的なサポートをしているとおっしゃっていますが、具体的にはどのような活動をしているのでしょうか？

A 専門家ではないので、きちんとお答えできないかもしれませんが。UNDPは、キャパシティ・ビルディングといって、その途上国の人たちひとり一人の能力を向上させるプロジェクトを行っています。たとえば道路を直したり、自分たちの地域の公民館を建てたり、何でもいいのですが、必ず現地の人が自分たちの力でやります。たとえば小学校を建てたり、日本からパソコンや農作業の機械、大学で使うような実験道具などを供与したりしたとしても、それらが壊れてしまった時に自分たちで修理できるようにしておかないと、「道路が壊れたからまた造って」「○○が壊れたからまたちょうだい」ということが続いてしまいます。そういうことがないように、現地の人に建築などすべての作業に携わってもらわねばです。きちんとさまざまな器具の使い方も学んでもらいます。そしてその人がきちんと学ぶだけでなく、その人がまた次の人に教えられるようなシステムを作っていくことを基本としています。